本学主催事業報告

ガイコツを作る
—異文化を学び、発信するということ—

小林貴徳

ガイコツとは、なんとも不思議な存在ではないか。こうして原稿を書く私のなかにも、いまこの文を読んでいるあなたのなかにもガイコツがいる。民族や宗教、国籍、政治的信条や身体的特徴がいかに異なろうとも、私たちの内側には例外なく潜んでいる。ところが、おもしろいことに、文化が異なれば、ガイコツに付与された意味が違ってくる。

2023年度の千代田学関連事業で制作したのは、メキシコの文化的伝統「死者の日」を彩るガイコツの等身大立像である。恐ろしさや生への執着心などではない。むしろ、底抜けに陽気で派手なすがたのガイコツ像が学生有志の手によって作り上げられた。

ちょうど一年前、2022年度の千代田学関連事業では、「死者の日」の祭壇を再現し展示したが、今回はその構成要素のひとつガイコツにフォーカスした。メキシコで「カラベラ」と呼ばれ親しまれているガイコツは、19世紀後半に活躍した版画家ホセ・グアダルーペ・ポサーダの作品によって広く知られるようになった。2023年がポサーダの没後110周年にあたることもあり、ポサーダがカラベラに込めた思いを発信することを目的として、ガイコツ貴婦人の制作と展示を実施することにした。

等身大立像の制作にあたったのは、海外研修プログラムでスペインやメキシコに留学していた国際コミュニケーション学部の2年生と3年生、そして、2024年春に海外研修へ旅立つ1年生の有志である。ウェブサイトや文献などでイメージを膨らませつつ、学生たちは2体の服飾用トルソーに着色し、衣装を着つけた。肝心の頭骨はアクリル染料を用いて丁寧に仕上げられた。昨年度と同様に、本学10号館1階の靖国通り側エントランス脇を展示スペースとし、マリーゴールドの造花や電飾用ロウソクとともに設置されたガイコツ貴婦人の像は、道行く市民を見守る格好となった。

ポサーダが生きた19世紀末から20世紀初頭のメキシコといえば、フランスのナポレオン三世の

ガイコツの大舞踏会Gran fandango y francachela（ポサーダ作、1900年）

干渉による帝政期とそれに続くポルフィリオ・ディアス大統領の長期独裁政権、さらには民主化を求めるメキシコ革命期へいたる激動の時代だった。政治を風刺する作品のほか、民衆の享楽や不安をユーモアたっぷりに版画に刻み込んだポサーダにとって、カラベラは極めて民主的な表象だった。白人系であっても褐色であっても、富める者も貧しき者も、死んでしまえばみな真っ白なガイコツだ。ポサーダは近代化を成し遂げつつも社会階層が明白で、貧富の差が拡大するメキシコ社会の偽善のさまを皮肉って彼の作品にカラベラを登場させたという。

ともすれば、「不吉さ」や「死」を連想させる展示だなどと批判されかねないモティーフであったが、展示の背景を解説するポスターを掲示したこともあり、本企画のねらいは展示を見る人に伝わったように思われる。異文化を理解するうえで重要なのは、表層のみに目を奪われるのではなく、その歴史や背景を学び、どのように異なるのか思考を巡らすことではないだろうか。千代田学関連事業としての展示が、学生の学びを社会に発信する貴重な機会になることを今後も期待したい。

写真上：制作展示で活躍した1年生有志
写真下：夜間に浮かび上がるガイコツ展示
（本学10号館1階靖国通り側）